

星 座 神 話

エチオピア王家のロマンス

秋から冬にかけて北天を賑はす星座の中に、王一家「ロヤル・フアミリ」⁷と呼ばれて居るセフェ王、アンドロメ、カシオペア及びペルセウスがある。

之等の星座はギリシヤ神話中の人物を天上界に置き換へたもので、四千年の歴史を誇る神祕の國、エチオピア王家と相關聯して、星座の形よりも、むしろ有名なロマンスに興味を惹かれて親しまれて居る。

之等が取材とされたのは西暦前七世紀にギリシヤの女詩人サツフォに歌はれ、亞いで同五世紀にエウリピデス、ソフォクレスに依つて戯曲にされた。

セフェ王はエチオピア王、カシオペアはセフェ王の妃の君、アンドロメは其の姫君で、ペルセウスは姫の脊の君であつた。カシオペア王妃はその美貌を誇つて、大神ジュピタの妃ジュノウや地中海の深底に棲息し、常に海馬に乗つて、海神ネプチューンに侍り、波間に戯れて居たネイレウスの五十人の精女(ニンフ)達ニイリイズを凌がうと力めて、彼女等の機嫌を損じて了つた。

彼女等が海神ネプチューンに其の旨を訴へたので、海神はエチオピアの海邊に怖ろしい一疋の海魔を送つた。此の海魔は海邊に出沒して、牛や馬、はては漁師の子供達まで海に連れ込む様になつた。

王と王妃は大神ジュピタに救助を求めたが、只、星と輝くアンドロメ姫を怖ろしい海魔に與へるより外には海魔の怒りを解き得ないとの神託であつた。斯くして姫はエチオピア國土の人身御供として、トラキヤの北風に裸身を曝され、海邊の巨巖の角に、手首を鐵鎖に繋がれて、風前の燈火の如く、海魔の出現を、幾日も待たなければならなかつた。

間もなく、姫の周圍を飛び交ふ慌しい海鳥の羽音と啼聲が、怪魔が姫に近づく事を報じた。今や海魔は磯傳ひに、南風に送られ、巨大な黒船の如く、見る見る近づいて來た。その大きな横腹には、貝殻や海藻が生ひ茂つて居た。海魔が潮を吞吐する度に、廣い口から流れ出て、旭光を受けて黄金色に輝いた。海魔は姫を見た。姫は觀念の臉を堅く閉ぢて居た。海魔は今や一呑みに

と姫を目がけて巨巖を這ひ上つた。

折も折、俄かに馬の嘶きが空に起つて四邊に飜した。虚空に輪を畫きつゝ巨大なる影を蒼々と海邊に投げ乍ら現はれたのは翼の生えた神馬ペガス、馬上には一勇士が打ち跨つて居た……勇士ペルセウスは南國の蛇髪の女怪メドウサを首尾よく退治して、其の生首を革袋に入れ、翼の生えた飛行靴タラリアを穿ち、寶劍ファルクスを佩び、セリフォス島への歸路にあつたのである……姫は恐怖と喜悅の瞳を開いた。ペルセウスの顔は曉の明星の如く輝いて居た。彼は恰も、素盞鳴尊が櫛稻田姫に手を延べた如く、危機一髪にあるアンドロメ姫を救はんものと、右手の寶劍、左手の革袋より取り出したメドウサの生首をつきつけると、海魔は忽ち石に化して了つた。

斯くして姫を始めエチオピア國土は完全に非常時より救ひ出された。偉業成つて勇士プルセウスとアンドロメ姫との結婚式が盛大に舉行せられた。式の大饗宴の眞最中、姫の許婚だつたフィオネスが部下を引き連れて、王宮に亂入して來たが、ペルセウスが再び高く掲げた、メドウサの生首をつきつけられた刹那、悉皆、立ち所に石と化して了つた。

斯くしてエチオピア王家に再び平和が訪れた。死後四人共天上界に移され、王一家「ロヤル・フアミリ」と呼ばれ、親しまれて居る。エチオピア王家に彩られた有名なロマンスを思ひ浮べつゝ、北天に瞳を注ぐ時、之等四星座は神話の世界の雰圍氣を罩めて、押迫つた魅惑を把握しつゝ、私達の魂を宇宙の深淵へと展開させて行くに充分である。

— 五 首 —

セフエ王とカシオペヤ妃とペルセウス、アンドロメ姫を永久に護らん
神無月仰ぐ瞳にセフエ王は、雙手^{モロデ}を舉げて永遠^{トロシヘ}を説く
カシオペア美を誇りたる報^{ムク}ひとし、夜々倒しまに椅子に坐すかや
メドウサの生首^{クビ}を左手^{コンデ}に寶劍を、右手^{メテ}に雄々しやペルセウス立つ
霜枯れの空を仰げば北天に、見よ輝けるアンドロメ姫

(十、十、八記) 小番城生